

'95—1・2

北海道民族学会通信

北海道民族学会

〒047 小樽市緑3丁目5番21号

小樽商科大学 津曲敏郎研究室気付

Tel & Fax (0134) 27-5424

題字：椿坂小龍(鮎の会所属)

編集：津曲敏郎

発行者：和田 完

印刷所：鶴北海道機関紙印刷所

1995年度 第1回研究会発表要旨

(5月20日 小樽商科大学大学会館)

北太平洋沿岸地域における編織物

— 物質文化と生業との関わり —

齋藤 玲子*

北太平洋沿岸には、編織物文化が発達しているといわれてきた。民族誌などから用途や素材、採集・調製の時期や編み方の技法などを見ていくと、次のようなことが一般的にいえる。

衣・食・住・生業・精神文化など生活の全般をとおして、植物性繊維で作られた編織物はさまざまな用途に用いられてきた。殊に、漁網・敷物・容器・結束材としての利用は、広範な地域に見られる。網を編んだり布を織ったり、あるいはバスケットやマット類の結束材とするための「糸」は、広範にイラクサが用いられていた。貯蔵用・運搬用の容器などとして用いられてきたバスケット細工(含む編袋)は、その軽さと通気性から乾燥した食物(魚・植物)を入れるのに最適であったが、目を細かく編んだ防水性の高いものもあり、漿果を入れたり煮炊き用の容器にも利用された。これらにはイネ科あるいはカヤツリグサ科(特にスゲ属)がよく用いられ、とりわけイネ科のハマニクは、広く主要な素材となっている。マット類(莫蓆・蓆様のもの)は、その通気性ならびに保温性を活かし、敷物・壁掛け・蓆帆・包装材料などに用いられた。この他、牽引ロープや荷縄としての綱類や、特にアイヌと北西海岸インディアン

では衣類への利用も多かった。

編織物を作るには、かなり大量に素材を集める必要があり、その季節をみていくと、食料を大量に収穫できる時期とうまくずれていることがわかる。草類は十分に成長し、漁期が終わった後の秋に採集され、樹皮類は春～初夏が水分があがって皮が剥ぎやすいという。採集された生の素材は、乾燥など貯蔵に適するように処理しておき、実際に編織して物を作るのは冬である。

編織の技法には、①交叉(Plaited) ②振り(Twined) ③巻き(Coiled) ④輪奈(Cycloid) + 装飾(Ornamentation) のヴァリエーションがある。なかでも「振り」は、北アメリカの北西部、アリューシャン列島から北カリフォルニアとグレート・ベイスンにまでわたる海岸地域住民で特に重要といわれ、「巻き」は南西部とカリフォルニアの南部で優勢で、アラスカやブリティッシュ・コロンビアの内陸、ワシントンとグレート・ベイスンにも拡がっている。

上のような事柄を民族誌から抽出する作業をとおして、なぜ北太平洋沿岸に編織物文化が発達したかを考えてみると、第一には植生が比較的豊かで繊維素材となる植物が多量に採集できたという

環境条件が挙げられ、次に食料を採集・運搬し乾燥して保存する用具として都合の良いものであったといえる。これより更に北部のツンドラの地では、食料をカラカラに干したり貯蔵の際に通気性に留意したりする必要がさほど無いようである。第三には、この地域では採集活動で得られる植物や貝類などの食料も多く女性や子供・老人の労働が大きな役割を持ち、家族内で分業をする余裕があったことが考えられる。また、海岸部での定住的な生活と、内陸部の狩猟あるいはトナカイ遊牧など移動をとまなう生業形態との違いも物質文化に大きな影響を与えているようである。例えばヨヘルソンは、海岸コリヤークでは植物繊維などのバスケット編みが発達しているが、トナカイ・コ

リヤークの女性には時間がなく、テント暮らしは寒くて冬に材料を処理したりバスケットを編むには適していないと述べ、また、交易品として、トナカイ・コリヤークが海岸コリヤークからバスケットを得ていたことも記述している。

最後に、非常に精緻な編織物は儀礼に深く関わっていたということと、「みやげ」として生産されていたことから、近年までその技術が伝えられていたという事実も指摘しておきたい。

編織物の発達には素材の入手や技術の伝播といった側面のみならず、生業や居住形態などとの関連が深いと考えられ、これらの要素を物質文化研究に反映させることが課題と考えている。

カナダ・イヌイットの名前と社会変化

岸上 伸啓*

シベリア東部からグリーンランド東海岸にいたる広大な寒冷ツンドラ地帯で生活を営んできたエスキモー（ユピック、イバルイト、イヌイットおよびカラリット）と呼ばれてきた人々にとって、人名は個人を単に分類したり同定したりする手段ではない。名前は彼らの世界観や社会構造と深く関係しているのである。ここではカナダ国ケベック州アクリビック村の事例を中心にカナダ・イヌイットの名前について考えてみたい。

カナダ・イヌイットの「伝統的な」名前には、次のような特徴や属性がある。①名前には靈魂が宿っている。②名前は特定の性別と結びついていない。③ファーストネームのみが存在していた。④一人の人が複数の名前を持つ。⑤名前を共有する者は特殊な同名者関係を形成する。⑥名前は親族呼称や行動に影響を与える。⑦名前は社会的人格やアイデンティティをつくりだす。しかしイヌイット社会が世界システムに接合し、国家に包含されるにつれて、イヌイットの命名や名前にも変

化がみられた。

1930年代末までにアクリビック地域のほとんどのイヌイットは欧米からやってきた宣教師から洗礼を受け、キリスト教徒になった。この時にピーターやマリーのような洗礼名がイヌイットに付けられたが、それらには性別が付随していた。例えば、アママツアクというイヌイットはアダムという洗礼名を貰っている。また1950年代以降、行政効率の向上と同化政策の実施のために名字の導入と固定化が図られた。アママツアクにトーマスという洗礼名をもつ子供がいたとすると、父のイヌイット名アママツアクがその子の名字となり、政府の登録上はトーマス・アママツアクとなった。すなわち父姓が固定化され、性別がはっきりする名前が使用されるようになったのである。

このような現象をみるとイヌイットの命名と名前は大きく変化したように見える。そして一部には、イヌイット名が新生児に付けられなくなったとの報告もある。しかしアクリビック村では、現

在でもミドルネームとして複数のイヌイット名が注意深くかつ意図的に新生児に付けられており、かつ同名者関係も日常生活の上で機能し続けている。すなわち名字や英名が導入された後も従前通りのやり方でイヌイット名は新生児に付けられ続けているのである。

命名は個人や家族の主體的な決定によってなされるが、命名には個人の意図を超えた社会的な効果がある。社会を特定の名前のセットないし関係の集合体であると考えたと命名を通してほぼ同じ名前の集合からなる社会が通時的に再生産され続けていると言える。すなわちキャンプや村の成員が他出したり死去した場合、その人の名前をそ

のキャンプや村の新生児につけることによって、特定の生物学的個体がキャンプや村から物理的にいなくなってもそれらの人の名前が特定の拡大家族関係集団や村に常に残ることになる。別言すれば、個々の拡大家族集団や（複数の拡大家族から構成される）村社会は、ほぼ同じ人名のセット（集合）から構成され続けることになるのである。イヌイット社会は急激に変容している一方で、命名を通してコミュニティが象徴的にせよ再生産され続けているのである。

1995年度 第2回研究会発表要旨

（7月22日 小樽商科大学大学会館）

明治初期の識字文化と女性

土屋 礼子*

従来の識字に関する研究は、識字率の向上、すなわち教育の普及・学校の就学率上昇をめざす立場からの研究が主で、無文字社会を対象とする民俗学・人類学がそれを補完してきた。しかし近年は、識字を善とし社会近代化の前提とする文明観に疑問を呈し、識字の意義を再検討する試みが、コミュニケーション研究・社会史・社会教育・社会言語学などの各分野で現れてきている。

日本において識字が問題となった最初は明治初期である。義務教育の就学率を識字率の代わりとしてはほぼ百分と考えている現在とちがい、明治期には漢文漢語の素養のある知識人と、全く字の読めない非識字者と、その中間にかな文字程度は読める準識字層が存在していた。そのような識字階層を最もよく代表しているのが、当時発行されていた二種類の新聞である。一方は知識人読者を対象とした「大新聞（おおしんぶん）」であり、他方は、「婦女童蒙」と称された準識字層を対象とする総ふりがな付きの「小新聞（こしんぶん）」

である。これらの新聞は文明開化のメディアとして都市を中心に発行部数を伸ばし、特に「小新聞」の筆頭である『読売新聞』は一万以上の読者を獲得した。こうした新聞読者の外側には、文字と無縁の非識字層が広がっていたと考えられる。したがって小新聞は、当時の識字文化の実態を推測する上で重要な資料なのである。

日本において最初に識字調査が行われたのも明治初期であるが、当時の識字の実態は必ずしも明らかではない。占領期のGHQによる識字調査を除けば、日本では体系的で精密な識字調査は殆ど行われておらず、また、漢字とかな文字という文字体系による識字層のちがいも明確に捕らえられていないからである。当時の識字率に関しては、ハーバート・パッシンの大胆な仮説（『日本近代化と教育』1969邦訳）、『文部省年報』によるいくつかの県の断片的な数値、長野県北安曇郡常盤村での識字調査（1881）があるが、最も重要なのは『東京府管内統計表（明治九年）』の中の識字調

査である。これは今まで言及されていない資料であり、また調査方法などが不明であるが、人口が大きく文化的中心地である首都を対象とした興味ある統計値を提出している。

これによれば、東京府で「二十歳以上書ヲ読ミ字ヲ書キ得ル者」は、男で81%、女で71%、全体で76%に達し、身分別では華族100%、士族94%、平民74%であり、相当高い識字率である。そこでこの数値に、明治九年の東京における主要新聞の発行部数から計算した推定読者数を照らし合わせてみると、全識字人口の内、大新聞の推定読者数は11%、小新聞の推定読者数は23%を占め、識字者のうち約三分の一が新聞読者であったと推測される。また、大新聞の読者は士族が主で、小新聞の読者は主に平民であったと推定され、これまでの投書の分析結果と一致する。

問題なのは、このような分析から推定される小新聞の読者が、旧下層武士や商人に代表される平民の男子であり、女性読者はごく少数であるにも

かわらず、小新聞は「婦女童蒙」すわち女子供のための新聞を合言葉にしていたことである。その理由は、漢字は男文字、かなは女文字という文字のジェンダーが、かな文字のみによる新聞の失敗に見るように、文字ナショナリズムの挫折により破壊されなかったためである。そこで小新聞がとった戦略は、「婦女童蒙」のためであるという口実の下に、女文字である仮名を全文に添えることであった。

もう一つ重要なのは、「俗談平話」と称された小新聞の文体である。それは話しことばを基にした振りかなを主体とし、それに漢字を当てはめた文章で、俗訓を多用し漢字の脱古典化・非神話化を進めるものであった。このように小新聞は漢字を庶民にも普及する道を開いたが、女性が漢字を学ぶことは社会的規範の中では必ずしも肯定されず、明治以降も女性の識字文化は「女ことば」の中へ囲い込まれてゆくのである。

北東アジア沿岸における海獣狩猟の位置づけ

渡部 裕*

北太平洋沿岸はサケ類や海獣類などが豊富であり、とりわけ北東アジア沿岸では広範な地域に季節的海氷が生成されるため、海獣類が豊富にみられる。本論では海獣狩猟文化からみた北東アジア沿岸文化の特徴を考えてみたい。

主な海獣類は海氷と密接な関係をもつアザラシ類やセイウチ、岩礁や島嶼で繁殖するゼニガタアザラシ、トド、キタオットセイなどの鰭脚類やイルカ類、さらにヒゲクジラ類、マッコウクジラなどの中・大型鯨類である。なかでも中・大型鯨類の多くは春季に沿岸沿いに北上する回遊様式をもつことから、坐礁や漂着する“寄り鯨”を利用する機会も多く、また耐波性の低い船であってもクジラに接近できる可能性があった。精神文化の面

でも〈海の神〉への信仰が広くみられ、シャチが〈海の神（主）〉の象徴あるいは強い関係をもつ動物として認識されている。獲物の再訪を祈願する海獣類の頭骨を対象とした送り儀礼は北東アジアのほぼ全域にみられる。

地域的特徴

すべての沿岸諸民族はアザラシ類を捕獲してきたが、とりわけ環オホーツク海沿岸では春季のアザラシ猟が主たる海獣猟である。極北・亜極北地域のコリヤーク、チュクチ、アジア・エスキモーはアザラシ類とともにセイウチや中・大型鯨類を捕獲し、年間を通じていくつかの狩猟期が設定されていた。カムチャツカ南部や千島列島、北海道太平洋沿岸ではオットセイ、トド、ゼニガタアザ

ラシ、クジラ類など海水を避ける傾向の海獣類を捕獲・利用し、これらの回遊に合わせた狩猟時期が設定されている。トリカブト毒を利用した捕鯨が行われていた地域でもある。狩猟具は、広く回転式離頭鉈が使用されていたが、サハリン・アイヌ、ウイльта、ニブフ、ウリチ、オロチ、エヴェ

ンでは鉄製鉈先と船底型の中柄をもつ浮鉈も使用していた。

海獣の利用

極北・亜極北沿岸では食料の大部分が海獣類の肉や脂肪である。北方地域では炭水化物をほとんど摂取できないため食料として脂肪が重要な位置を占める。ことにカムチャツカ半島南部から環オホーツク海沿岸などサケ類への依存が高い地域では干しサケを食べる際のつけあわせとして欠かせない。もちろん毛皮は衣類やさまざまな生活用具、狩猟具の素材として重要であり、極北地域では皮船の覆いや、皮紐、ブーツなどに利用された。一方、アムール川下流域やサハリンでは衣類の材料としてアザラシ皮の需要が比較的高く、とくにイヌ樺乗用のアザラシ皮スカートは特異である。

経済・文化領域

以上のことから、おおまかに3つの経済・文化領域を設定することができる(図1参照)。すなわち、1) 極北・亜極北領域: アジア・エスキモー、チュクチそして大部分のコリヤークを含む地域である。漁撈への依存が比較的低く、アザラシ類のほかセイウチ、大型鯨類などへの依存が高い地域であり、北米の極北・亜極北の沿岸文化とも共通性をもつ。2) 環オホーツク海領域: 千島列島を除くオホーツク海沿岸域で、干しサケの利用が高く、脂肪を目的としたアザラシ狩猟が優先する地域である。大部分の地域に浮鉈と男性用アザラシ皮スカートが共通する。3) 無海水・少海水・島嶼領域: 海水の影響が少ない沿岸・島嶼であり、オホーツク海を除く北海道沿岸から千島列島、カムチャツカ南部からコマンダー諸島を含み、アリューシャン列島からアラスカ半島などとも共通性をもつ。

このような文化・経済領域からアイヌ文化をみると、サハリンや千島列島ばかりか北海道さえも一様なものととらえることはできない。そして干しサケとアザラシ油の利用にこだわれば、アイヌは「サケーアザラシ文化圏」の南端に位置するといえる。

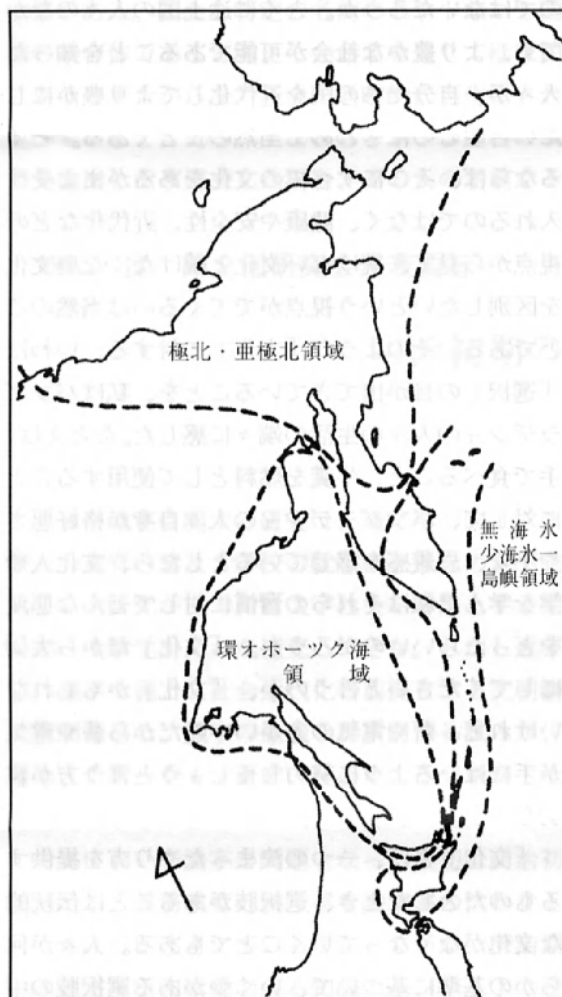


図1 海獣狩猟からみた文化・経済領域

1995年度 第3回研究会発表要旨——○

(12月9日 小樽商科大学大学会館)

伝統的出産と母子保健：バングラデシュで考えたこと

松岡 悦子*

途上国における伝統的な出産を、文化人類学および医学（母子保健）の視点から見たときに私自身が感じたジレンマを述べて、文化人類学で扱う「文化」について、また社会の近代化と文化とのかわりについて考えてみたいと思う。

今回、途上国の一つであるバングラデシュへ、母子保健の立場から調査に出る機会があり、バングラデシュでの出産をより安全なものにするにはどうすればよいかという立場から伝統的な出産を見ることになった。出産は、医学的なことがらであると同時にさまざまな習慣や信仰にまみれた文化でもあるから、その文化を安全性の視点から評価するとは、すなわち出産にまつわる習慣を望ましいものと望ましくないものに区別することでもある。少なくとも、どんな伝統や習慣であれ文化として尊重するというこれまでの文化人類学的態度では、評価はできないことになる。だが文化人類学を学んだものとしては、伝統的習慣がいかに非衛生的であろうと、医療や栄養と無縁であろうと、また人々に教育がなかろうと、それらを近代化の遅れとか、貧困、文盲のせいだとは考えてこなかった。文化相対主義の立場から、どのような習慣も「文化」として尊重されるべきだと考えてきたと言える。

だが、バングラデシュでは妊娠・出産で死ぬ女性の割合は日本の約68倍、乳児死亡率は20倍である。この高い死亡率の背景には、貧困や栄養不良、近代医療や交通などの社会資本の未整備、文盲、女性差別などがあると言われている。このような高い死亡率をも「文化」として尊重する立場も可能であるが、誰しも貧困より豊かさを、高い死亡率より健康を、教育がないよりはあることを、女

性差別よりは男女の平等を望ましいことと考えるのではないだろうか。とくに途上国の人々のなかでも、より豊かな社会が可能であることを知った人々が、自分たちの国を近代化してより豊かにしたいと望むのはきわめて当然のことである。とするならば、そこにすべての文化をあるがまま受け入れるのではなく、健康や安全性、近代化などの視点から見て、続けたい文化と続けたくない文化を区別したいという視点がでてくるのは当然のことである。そのような「文化」に対する、いわば「選択」の目が出てきていることを、私はバングラデシュの人々の生活の端々に感じた。たとえば、手で食べること、牛糞を燃料として使用することに対して、バングラデシュの人々自身が格好悪さや不安、忌避感を感じているとしたら、文化人類学を学んだ私はそれらの習慣に対してどんな態度をとったらいいのだろうか。「文化」だから大切にしてくださいと言うのか、「文化」かもしれないけれど、薪や電気の方がいいのだから薪や電気が手にはいるように努力しましょうと言う方が親切なのか。

「文化」とは、一つの決まったやり方を提供するものだとしたとき、選択肢があることは伝統的な文化がなくなっていくことでもある。人々が何らかの基準に基づいて、いくつかある選択肢の中から自分の行動を「選択」する社会は、伝統に従って決まったやり方をする社会とは異なる。この選択肢のあるなしが、出産においても安全性を高める上で重要な点ではないかというのが今回の調査の一つの結論であった。なぜ選択肢かと言えば、出産を安全に運ぶ上で重要なことは、異常を見極めて対処することであるが（正常なら無事に出産

するので)、異常と正常を区別しようという視点は経験的な(決まり切った)助産のやり方からは生まれない。また、そのような視点は異常になったときの選択肢がある(たとえば病院に送る)社会でのみ生じてくるものだと思われる。さらに、異常と正常を区別したいと思っても、その識別を可能にするような手段としてのテクノロジーも必要になる。このような識別、区別といったことが

らは選択肢があることを前提としている。つまり選択肢がなければ区別もあり得ない。道が一本しかなければ別の道に分かれることはできないのであるから。

したがって、近代化された社会が多様な選択肢を許す社会であり、かつ出産の安全性だけに限らず、安全性を重視する社会であるということは、同じことからの両面であるように思われた。

十九世紀の樺太西部の住民について

池上 二良*

0. 間宮林蔵『北夷分界余話』(1811)は当時の樺太の住民、南方初島人物(アイヌ)、ヲロツコ(ウイルタ)、スメレンクル(ギリヤク、ニブフ)について記すが、奥地の夷がシルンアイノと自称することにもふれている。松田伝十郎『からふと嶋奥地見分仕候趣奉申上候書付』『からふと嶋奥地之儀奉申上候』(1808)、『北夷談第三』(1804-1808)はこれをさすとみられるシルングル(シロノウタレ)について詳説する。

1.1 シルングルの分布をみると、かれらは樺太西部に居住し、松田上掲書には、出稼ぎ先のポロコタン(北緯50度線のすこし北)は別として、その北のモシリヤに四軒、さらに北のヲツチシ・アルコイではスメレンクルと混住するとある。以下の文献の記述はシルングルの名称を使わず、他住民と区別していないが、おそらくシルングルを含むものだろう。L.v.Schrenck, *Reisen und Forschungen im Amur-lande in den Jahren 1854-1856*には、Pilja-wo (Porokotan)はGiljaken, Ainoが半々、その北のKithëusにはAino丸小屋一つがあると聞いたとあるが、このアイヌとはおそらくシルングルだろう。成石修『東徼私筆』(1857)がスメレン(クル)はホロコタン三・四軒、その南サアルエ六軒もあるよしと記したものにはおそらくシルングルが含まれている。岡本文平

『北蝦夷新志』(1867)に原住民住居がタゲに四家、それより南のアラコキ七家、アラコキとオッチシの間に三家、オッチシ四家、アタゲ三家、なおさらに南のキトウシ蝦夷一家、ポロコタン蝦夷三家とあるが、タゲから南「土人、ミナ蝦夷種ニテ、スメレン妻ヲ娶ル、風俗ハスメレンナルモ、其实蝦夷ナリト云」と記されている。シルングルは、間宮の流布本『東鞆紀行』の旧満鉄大連図書館本等や松田上掲『奥地見分』によれば、大陸にも渡っていた。

1.2 シルングルの習俗については、髪のかき方、衣服、服飾などを松田、成石上掲書が記すが、アイヌと異なってしまう樺太北部や大陸の住民に似ている点がある。

1.3 シルングルは文化変容を受けていても、自身が確言した(松田上掲『奥地見分』)ように、もとはアイヌであろうが、あるいは実は異なる出自かは、なお問題として残ろう。

1.4 シルングルのことばについて 松田上掲『北夷談』によると、かれは最初にポロコタンで出会ったシルングルのことばがわからなかったが、夷言(アイヌ語)が少しずつまじっていて通じた。ヲツチシでも言語が一向わからなかったが、土人の一人が夷言を発したので通じたという。通じなかったのはニブフ語であろう。またアイヌ語もど

の程度かにせよ使っていた。シルングルはこのように二言語を使用したとみられるが、アイヌ語の方が古くからの言語だろう。シルングルのことばは松田上掲『奥地見分』にシロノウタレとシンヂツの2語と一つの文が記録されているが、これらはアイヌ語である。成石上掲書にはスメレンの6語が書き留められているが、この少なくとも3語は明らかにアイヌ語である。そのアイヌ語がアイヌ語のどんな方言特徴をもつかは上掲シンヂツ(元)の語がこれを示している。この語形はタライカ方言のsinrit [ʃindʒit] (根) (故東ムラさんによる) に一致して北海道方言のsinrit (根) と異なり、また語末がtであることは樺太の他方言でtでなく一般にhが対応するのと(またライチシカ方言sinrisとも)異なる。シルングルが使ったアイヌ語方言は西部にあっても東部のタライカ方言に連続するもののように見える。西部にもかつてはウショロあたりより北にはアイヌ語のかかる方言が分布していたのかもしれないが、なおシルングルの居住地とタライカ地方はポロナイ川・ティミ川を経由する交通路によって連絡されることが注意される。シルングルが元来さらに別の言語をもっていたかは、なお不明である。

le P. Furet(1860)には1856年ごろのJoncquières湾(サハリン・アレクサンドロフスク地方)の住民の97項目の語が載る。例 homme(人)はnioub' とある。くわしくは渡部みち子氏の研究に待つ。

2. スメレン(グル)(ギリヤク)の樺太西岸の分布の当時の南限は、松田上掲『奥地見分』ではモシリヤのなお北のナヨロー軒であり、その後のSchrenck上掲書はPilja-woとし、さらに後の岡本上掲書にはポロコタンに一家、さらに南のナヤシに一家が記されている。

3. 松田上掲書によれば、テッカ(Тык)川の川筋其外山奥にヲロ(ツ)コがいてトナカイを運搬・乗行に使っていた。これはやはりウイルタであり、他種族ではないと考えられ、ウイルタの生活行動範囲が当時樺太の西部にも及んでいたことが知られる。

引用・参考文献

- 間宮林蔵『カラフト島^{從シラスシ至ホロコタン}再見分仕候趣申上候書付』文化5年(間宮林蔵述 村上貞助編 洞富雄・谷澤尚一編注『東韃紀行』[東京 平凡社 1988年]所収)
- 『北蝦夷島地図凡例 附里程記』文化7年(上掲書所収)
- 『北夷分界余話』文化8年(上掲書所収)
- 『東韃地方紀行』文化8年(上掲書および『日本庶民生活史料集成』第五卷(高倉新一郎編集)[東京 三一書房 1969年]所収)
- 『東韃紀行』[大連 南満洲鉄道株式会社 大連図書館編 同会社発行 昭和13年]
- 松田伝十郎『からふと嶋奥地見分仕候趣奉申上候書付』文化5年(上掲洞・谷澤編注『東韃紀行』所収), 『カラフト島奥地見分仕候趣奉申上候書付』文化5年(高倉新一郎編『犀川会資料』[札幌 北海道出版企画センター 昭和57年]所収)
- 『北夷談』寛政11年(1799年)一文政5年(1822)(大友喜作編『北夷談・北蝦夷図説・東蝦夷夜話』[東京 北光書房 昭和19年]および上掲『日本庶民生活史料集成』第五卷所収)
- 松浦武二郎『北蝦夷山川地理取調図』安政7年(1860年)
- 成石修(輔)『東徼私筆』安政4年(成石修識 大野良子校註『東徼私筆』(東京 政界往来社 昭和53年)
- 岡本文平『北蝦夷新志』慶応3年
- Le P.Furet, Lettres à M. Léon de Rosny sur l'Archipel japonais et la Tartarie orientale...suivi d'un Traité de Philosophie japonaise & de plusieurs Vocabulaires. Deuxième Édition. Paris 1860(1861?).
- L. von Schrenck, Reisen und Forschungen im Amur-Lande in den Jahren 1854-1856. St. Petersburg 1858-1900. Band III, erste Lieferung (1881).